

一 大地の恵み

斉藤 貞利

県下でも有数の米所であるえびの市。この黄金色こがねいろに輝く豊かな大地は、ふるさとの人々の開墾への情熱と努力の結晶であるともいえる。中でも、明治時代の医師・斉藤貞利は開墾に情熱を注いだ一人である。

明治三年（一八七〇年）、ふるさとのえびの市（当時・加久藤村）で開業した貞利は、西洋医学の名医として名高く、地元の人々のみならず、菱刈ひしかり・球磨くま・北諸きたもろ（現在の鹿児島・熊本・都城）からも多くの患者が駆けつけるほどであった。

毎日多くの患者と接し、人々の貧しい暮らしの様子を知る中で、貞利の心に一つの思いが芽生え、大きな夢へとふくらんでいった。その夢とは、地域の農業を盛んにして、村の人々の生活を少しでも豊かにすることであった。

（ふるさとの人々の生活を豊かにするためには、村の産業の中心である農業を盛んにすることが必要だ。）
この時から、夢に向かって前進する日々が始まったのである。

村の農業の発展を目指して、貞利は、まず馬の改良に取り組んだ。馬の品種を良くしていくことでふるさとの牧畜を盛んにしようとしたのである。また、当時、農家の副業として高収入が期待された養蚕業ようさんにも着目し、村の人々に養蚕への取組を呼びかけた。しかし、当時の加久藤村では桑畑が少なかつたため、十分に養蚕に取り組める状態ではなかつた。そこで、自ら桑畑八十アールを買い入れて人々に教えたりもした。

一方、貞利は、明治二十三年（一八九〇年）、この土地に適した稲の調査を始めた。この地方に適する稲を育てて

普及を図ることにより、米の収穫高を大きく伸ばそうとしたのである。

(この稲を栽培すると、いい米がたくさんとれるぞ。そのためにはみんなが耕作できる田んぼがたくさん必要だ。村を田んぼでいっぱいにするんだ。みんなでいい米をたくさんつくるんだ。)

貞利は、農作物の収穫高を上げていくためには、豊かな大地を生かしていくことが必要だと考えた。しかし、村では水田の耕地面積に限りがあり、農民すべてが満足な耕作ができる水田を持つことはできなかった。そこで、貞利は、わずかに畑のあった岡元地区を開墾することにしたのである。しかしながら、岡元地区は山腹に位置し、当時はほとんど原野同然の荒地地であった。

(いつの日か、この荒地地が、夏には見事な緑の田んぼになり、秋には黄金色に輝く…。そんな、多くの人々に恵みをもたらす大地にしたい。)

しかし、土地の開墾という大きな夢を持った貞利の前には、乗り越えなければならぬ壁がいくつもあった。第一の問題は水の確保であった。山腹に位置するこの地区では、なによりも水田に必要な水の確保が大切であった。少しのわき水と雨だけでは、とうてい水田に必要な水は確保できない。まずは、水を蓄えるための池を掘る作業からのスタートだった。

「斉藤先生、ほんとにここが田んぼになるのかね。」

「こんな山の上じゃ、水もあがらんし、水はどんどん地に吸われるばかりだ。」

予想以上に困難な状況となった岡元地区の開墾に、かり出された農民の間からも不満の声があがり始めた。ため池の次は、水を引く水路の整備をしなければならなかった。水田を耕作する前に、田に水を引くことすら難しいのである。おまけに、ため池から水路を約千五百メートルも引かなければならない。水の確保だけでも大変なことだった。

ため池と用水路を掘るだけでも多くの人々と歳月を必要としたが、何より開墾には莫大はくたいな費用が必要であった。賃金や用具の代金などで、貞利が準備していた資金はすでに底をついていた。だが、貞利の意志はそんな困難にも負けないくらいとても固いものであった。

「斉藤先生、もうこの開墾はやめた方がいい。水がないのに田んぼになるわけではないよ。それにこれ以上続けても金を捨てるようなもんだよ。」

「まだあきらめてはいかん。私の持っている田を買ってくれるという人も見つかったことだし、うちの田を売った金を使うから、費用のことは心配せんでもいい。」

「こんなに金がかかっているのに、まだ続ける気か……。水もあがらんこの土地を開墾するのと、元からあるいい田を買うのと、本当はどっちがいいんだらうか。」

「いい田んぼは金で買うことができる。でも、その金を農民みんなが持っているだらうか。それに、みんなが耕作できる水田を増やすことこそ、地域みんなの生活を豊かにしてくれるに違いないと思うのだ。」

貞利の熱意を知った人々は、開墾作業にまた協力を始めた。貞利も田を売った



利益だけでなく、さらに私財五千三百円あまりを費やしたといわれる。

開墾が始まって二十年近くたったころ、貞利の念願であった岡元地区に、ようやく水田が広がることになった。貞利の開墾の夢が実現したのである。

現在、貞利が開墾した岡元地区には豊かな水田が広がっている。水田の奥には当時の開墾の苦勞を思い起こさせる、ため池がある。この池は今でも人々に「斉藤池」と親しみ深く呼ばれている。

美しいふるさとの大地には、貞利と多くの人々の夢が根付いている。



現在のえびの市岡元